

天職は自分で創造できる

内側の「何かをやりたい」という声に耳をすまし
自分の「仕事」を創り出そう

榎本英剛氏インタビュー

「何かをやりたい」という気持ちは
天職をみつけるヒント

◎榎本さんは「天職創造セミナー」を開催されたり、企業向けにコーチングの研修などをされているようですが、仕事について考えるきっかけになったのはなんですか。

榎本 僕は以前、リクルートに勤めていたが、そこでは海外留学制度があったので、何度が応募しました。会社のお金で留学するわけですから、なぜ行きたいのか、何を学びたいのか、それが会社にとってどういうメリットになるのか説明するわけです。僕の場合は「とにかく留学したい」ということなので、いろいろ説明しても、やっぱりその辺を見抜かれますよね。それで、「お前が行きたいという気持ちはよくわかるが、なんのために行きたいのか、行って何をしたいのかよくわからない」と言われ、落とされ続けました。

そのときに「何かをやりたい」という気持ちに、理由が必要なのかなと思ったのです。将来のビジョンがはっきりしていないとまぐいかないよと言われましたが、本当かな。また、人が「やりたいことをやりたい」というと、日本では「わがまま」とか「自分勝手」という捉え方をされます。でも、人に何を言われても、留学したいという気持ちだけは消えませんでした。それで「こういう気持ちはどこから来るのかな」と思ったとき、頭の中

でふっと「贈り物」という言葉がひらめいたんです。これはもしかしたら、神様からの贈り物かもしれない。「何かをしたい」という気持ちは、天職を見つける上でのヒントのようなもの、たとえば天職が港だとすれば、「港はこちぢだよ」と教えてくれる灯台のような役割だと思ったのです。

何かわからないけれど、心から何かをやりたいという気持ちを、僕は「純粹意欲」と呼んでいます。そういうものに従って、はじめに自分が本当は何をしたのか、もつと言えは何のために生まれてきたのがわかっていると、お金のうけをした、有名になりたいと言っている、結局何を求めているかという、自分が生まれてきた理由、つまり「存在意義」を知りたいのではないかという気がするのです。

多くの人たちはただ生活費を得るために、自分の大事な部分を置きざりにして会社に行っています。たとえば「長期休暇をとりたい」と思っている、それは無理に違いないとか、本音が言えない部分がありますね。「自分が何をしたいのか」という内から湧いてくる気持ちにに従っているのではなく、「世間や会社や親がこう言っている」という、外からの情報や価値観に従って自分の生き方を選択しているのです。ですから意識的、自覚的な生き方ではありませんね。

こうして自分が本音のレベルで感じている感情や、いわゆる「魂」の部分はどこかに置

さざりにして、会社に行くわけですから、満足するわけがないと思いませんか。

◎そうですね。やっぱり世間や親の価値観に合わせて生きてしまっていることが多いと思います。

榎本 今の時代はスピードばかりが速くなって、そうした自覚的な生き方がますますできにくくなっています。でも、世間がそうであっても、勇気をもって立ち止まることもできるわけです。

僕は留学したときがそういう自分を見つめる時期になったわけですが、そのまま無意識的に夢遊病者のような生き方をしていたら、どんなになっていたんだろうと思います。今の自分の会社のあり方、仕事のあり方は絶対おかしいという心からの叫びに耳をふさぐことがどうしてもできなかったんですね。ですから留学するときには、自分がどういう方針で生きていけばいいのかわかれば、それでいいって思いました。この先、まだ何十年もあるんだから、このまま目隠しして生きているような状態よりも、いったん立ち止って自分の生き方のよりどころをまずはっきりさせてからでも、遅くないのではないかと思っただけです。それが、行ってみたら自分の天職まで見つけたのですから、不思議なものですね。やっぱり純粹意欲には意味があると思えました。

以前の僕がそうであったように、多くの人は心の声には蓋をして生きています。そうす

ると、だんだん意欲が無くなってきて、仮に一時的な意欲が湧いても、「別にいいや。めんどうくさい」という感じになってしまいます。ところが、いったんその蓋を開けると、「あ、これはおもしろい」「次はこれを勉強してみたい」と、まるで水道の蛇口をひねったようにやりたいことが、次から次に出てくるのです。

「何をするのか」よりも
「なぜそれをするのか」

榎本 僕にとって仕事について深く考えるきっかけとなったのは、留学時代にリー・ミンワの講演を聞いたことです。彼は中国系アメリカ人で、アメリカにおける人種偏見をテーマとした映画「恐れの色」をつくりましたが、その背景となったのは、彼の母親が人種偏見が元で数年前に殺されたことでした。「別に映画監督という仕事でなくてもよかったのです。「人種偏見をこの世から無くそう」というメッセージを世の中に伝えることができれば」と彼は語りました。つまり、彼にとってメッセージを伝えることが「仕事」であり、映画監督という仕事はその手段に過ぎなかったわけです。

私たちは今まで「なぜそれをするのか」よりも「何をするのか」を重視してきました。でも、今のような変化の激しい時代には、これから先もずっと安泰と言えような職業はないと思います。ただでさえ、形があるもの

は変化に弱いのですから。それにたいして、「なぜ」は形がない分、柔軟です。仕事を考えるときにもこの「なぜ」をベースに考えれば、それを表現するための「何」は無数にあることに気づくでしょう。たとえば、リーさんの場合も同じ「なぜ」を果たすために、映画監督の他にも人種偏見に苦しむ人たちに對するカウンセリングの仕事も同時に行っているのです。

◎榎本さんご自身は、今やっている仕事をどう思われますか。

榎本 僕は「人がもつと生き生きと仕事ができる世の中になりたい」と思っています。そのため、留学中に自分なりの勉強をして「天職創造セミナー」を作りました。また、「何をやりたいのか」を見つけた後、それを実現できるようにサポートすることも大事だと思いい、その手法を探しているときに、「コーチング」という「夢の実現をサポートする手法」に出会ったのです。ただ、最近ではいくら個人が変わろうとしても、会社が変わらないと難しいことがわかってきたので、企業がもつと個人にとって働きやすいところにするために、今はコーチングを企業に広める活動を中心に行なっています。

仕事は自分に合わせるもの

◎自分の内側でやりたいことがあったとしても、多くの人はそれを仕事としてやっ

けるとは思わないですよ。

榎本 僕は、仕事というのはいわゆる職業ではなくて、自分の可能性を最大限発揮するための手段だと思っています。たとえば、子どもが「お母さん、僕大きくなったら宇宙飛行士になりたいんだ」とか「私は女優さんになりたい」と言ったとき、結果的に女優になるか、宇宙飛行士になるかは別として、子どもがそういうものに魅力を感じた理由があると思うんですよ。それは、人前で自己表現をする喜びかもしれないし、誰にもできないような経験をするとという喜びなのかもしれない。どんな職業にも、なぜその職業を選んだのかという理由があると思います。

仕事を「職業」と捉える考え方は、ひじょうに人の可能性を狭める考え方だと思います。労働省の資料によると、現在約二万五千種類くらいの職業があるそうです。多いように思えるかもしれませんが、日本の労働人口は約六千万人なので、ひとつの職業あたり単純計算すると二千四百人くらいなんです。そう考えると少ないでしょう。

天職はその人が本当にやりたいこと、その人の可能性を最大限に発揮したり、生きがいを感じられるものだと思うので、僕は人の数だけあると思います。それなのに、たった二万五千しかない職業の中から選んで、その箱に自分を押し込めてしまうような考え方が、現在は主流なんです。最近、よく適職フェアというのを見かけますが、適職というのは、

今世の中に存在している仕事の中で一番自分にあっているものは何だろうという発想ですね。それは近似値にはなりますが、天職にはならないと思うんです。

仕事は、自分を合わせるものではなくて、自分に合わせるもの。今の人は仕事よりも自分が小さいと思っています。でも、実は自分の方が仕事よりも大きいので、仕事に自分を合わせようとしても入らないのです。

自分を表現するために 複数の仕事をもつ

榎本 勉強しているうちに気づいたのは、仕事をする上で障害となつていくのが、人々が仕事をどう捉えているのかという仕事観だということです。これが、イキイキと人が働けるようになるための一番のキーポイントだと思います。

今の日本人が共通してもっている仕事に対する固定観念は、大きく分けると四つあると思います。

- ①仕事とは生計を立てるための手段である
- ②仕事とはやりたくないことをやることである
- ③仕事とは職業であり、すでに存在する職業に自分を当てはめることである
- ④仕事とは同時にひとつしかできないものである

こうした固定観念と逆の仕事観という、仕事は単に生きて行くための手段ではなく

て、自分の可能性を最大限発揮できる、本当の自分を表現する手段ということですね。マシュー・フォックスという宗教家が「木にたとえると、職業は葉っぱにすぎない」と言っています。それでは、その幹は何かというところ、何のために生きているのかという人生の存在意義であり、生きがいだと思います。それがないまま、とりあえず生きて行くために目の前にある会社に入り、仕事をしてお給料をもらっていても、そこから生きがいを得るのは難しいと思うんです。

マズローの欲求段階説によると、人間には「生存」「安心」「帰属」「承認」「自己実現」の五つの欲求があります。

会社は給料という形で「生存」や「安心」の欲求を満たし、集団に属することで「帰属」の欲求を満たし、評価という形で「承認」の欲求も満たしてくれるかもしれませんが、でも、今の会社という組織が満たせるのは、せいぜいこの四番目の欲求までかもしれません。そもそも、すべての欲求を会社に求めるのは無理があるんです。つまり、人間の方が仕事よりも大きいんです。だから、職業や収入という形で仕事を捉えるのではなく、自分は何のために生まれてきたのかという、目に見えない内側の部分、心や魂の部分から仕事を捉え直していったら、身体も頭も心も魂も全部統合できる仕事があるんじゃないかと思えます。

もちろん、人間は肉体的な存在でもあるの

あはれおはせぬおはせぬ
あはれおはせぬおはせぬ
あはれおはせぬおはせぬ

あはれおはせぬおはせぬ
あはれおはせぬおはせぬ
あはれおはせぬおはせぬ



で、収入は必要です。ですから、それは会社からもらい、生きがいとはまた別のところで得るという考え方もあると思うのです。そういうわけで、僕は複数の職業をもつ「複職」の提案をしています。「本当の仕事」は存在意義で、それを表現するためのものとして職業がある。そのひとつとして生存の欲求を満たす職業があってもいい。会社の仕事は一部だと思っていればいいわけです。

今は個人が会社に依存している状態だと思えます。肉体的、経済的な欲求も、精神的な欲求も、すべて会社に求めるから、会社がやりがいのある仕事を与えてくれないということになるのです。会社はどうであれ、自分の生きがいは自分で見つけるという自主的な発想が大切ですね。

やりたいことをやっても食べていけない

榎本 僕のおっしゃる生き方はいいと思う。私もぜひそうしたい。存在意義、純粹意欲に従って生きていきたい。でも、現実に生きていくにはお金が必要ですが、そういう生き方では十分なお金が得られないのではないかとよく言われます。「じゃあ、あなたは一体いくらお金が必要なんですか？」と聞いてみると、実は答えられる人が少ないのです。せいぜい返ってくるのは今のレベルは落とせないので、現状維持できるだけのお金は必要だという答えです。

榎本 僕のセミナーに参加した方から「榎本さんのおっしゃる生き方はいいと思う。私もぜひそうしたい。存在意義、純粹意欲に従って生きていきたい。でも、現実に生きていく

僕はリクルートに勤めていたときはそれなりのお給料をもらっていましたが、留学するため、やめた途端にほとんど収入がなくなりました。でも、同時に消費も少なくなりました。我慢しているというよりは、自分がやりたいことをやるに精神が満たされるようになるので、余計なことにお金を使わなくなつたんですね。今、多くの人のお金の使い方を見ていると、やりたいことをやっていないので、ストレスがたまる。それを発散するために暴飲暴食や衝動買いをしたりして、たくさんお金を使うんです。それでまた働かなくてはいけないので、悪循環になります。

生きていくために最低限必要なのは、結局衣食住にかかる費用だけで、それ以外はブラスアルファなんです。生きていくために必要なお金は本当はそんなにいりません。すでに家のために高いローンを組んだり、子どもを

私立に入れていた人などは難しいと思います
が、それも自分の選択なので、こだわりさえ
捨てればやめることも可能だと思っ
てます。囚われのようなものを
変えていくことが大事
です。結局、何が本当に必要なかとい
うことです。

今の世の中では、やりたいことをやって貧
乏に生きていくか、やりたくないことをやっ
てそこそこに生きていくか、そのどちらか
かれないかと思っている人が多いです。でも、
偉そうな話ですが、僕はやりたいこともやっ
てちゃんと食べてもいけるとい
うことを示したいと思っ
ています。日本人は周りにそ
ういう生き方をする人がいないと、なかなか
やらないですよ。『あいつはわけのわから
ないことを言っていたけれど、ちゃんとやっ
ているじゃないか。もしかして自分にもでき
るかもしれない』と、周囲の人が思っ
てくれればそれでいいと思います。

◎これまで、セミナーやワークショップを行
なわれてきて、何が私たちに欠けていると
思われますか、何が大切だ思われますか？

榎本 「自分を信じて欲しい」ということ
ですね。小さいエゴの部分ではなくて、自分の
内から湧いてくるもの、自分の可能性などを
含めた「大きな自分」を。「人生はこんなもの
だよ」と諦めて生きていく人が多
い気がしますが、そういう話を聞くと、とてもさ
びしくなります。本当は自分が思っ
ているほど「自分」は小さい存在ではないので
すから。

「そんなことはどうせ無理だよ」と諦めるの
は、自分に対して失礼だと思うんです。

僕がアメリカで出会い、座右の詩にしてい
るものに、マリアン・ウイリアムソンの詩が
あります。これは、南アフリカのネルソン・
マンデラ大統領の就任演説でも使われまし
たが、内容を簡単に言うと、

——人々が怖れているのは、自分が思っ
ているよりも小さな存在だということではなく、
むしろ思っている以上に大きな存在なのでは
ないかということ。実際に、自分は自分が思
っている以上に大きい存在だ。なぜなら、
我々は皆、神の子なのだから——

その中でも、特に強く自分の中に残っ
ているのは、次のようなフレーズです。

——周りの人を苛立たせないために自分が縮
こまっただけでも、何の得にもならない。それ
は自分のためにも、周りの人や世の中のため
にもならない。自分が自分の光を放つこと
によって、周りの人の怖れや壁を取り除くこ
とができる——

だから、まず他人を変えようとするのでは
なく、自分を変えようとするんですね。縮
こまっただけでも、何の得にもならないです。
◎本当にそうですね。とても勇気づけられる
気がします。今日はありがとうございます。

※榎本氏のワークショップのお知らせ
2月26日、27日 1泊2日 (神奈川県藤野市にて)
問い合わせ先 ビーネイチャースクール
TEL: 03(5)4563(3)0603



「部下を伸ばすコーチング」
榎本英剛著
PHP 研究所



【榎本英剛】

一九六四年生まれ。一橋大学法学部卒業。株式会社
リクルートを経て、一九九四年に California Institute
of Integral Studies (CIIS) に留学。「生きがい」を
感じられる仕事観・組織観の研究に取り組み、修士
号を取得。帰国後、「天職創造セミナー」や「コーチン
グ・セミナー」を主催。現在は企業向けコーチングの
研修などに力を入れている。